『有　終』　第１輯　　－山田方谷と有終館－

刊行のことば

　備中松山城の御根小屋跡に校地を定めてより、明治・大正・昭和・平成と一世紀に亘る歴史と伝統を誇る高梁高校には、山田方谷先生の遺墨をはじめとして数多くの歴史的資料が存在しています。

　これらの歴史資料を集成した、「有終」資料篇を順次刊行することとなりました。

・小堀遠州作庭

　第一輯「山田方谷と有終館」は本校の学燈の源泉を明らかにしようとするものであります。

　どうかこれらの史資料が、同窓生をはじめ多くの方々に愛読され、新しい歴史の創造に生かされることを願ってやみません。

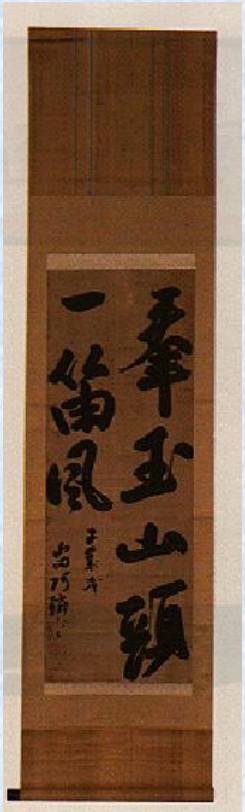
　刊行にあたって、山陽印刷株式会社、県史編纂室をはじめ、多くの方々のご協力に厚くお礼申し上げます。

　平成二年四月

　　岡山県立高梁高等学校長

　　戸　村　　彰　孝

山田方谷（やまだほうこく）



幕末の政治家、財政家、教育者として知られる。優れた漢詩人でもあった。備中松山藩領阿賀郡西方村（現高梁市中井町西方）に生まれる。名は球、字は琳卿、通称は安五郎、幼名は阿燐、方谷はその号である。聡明で、３，４歳より字を書き、その大字は見事であった。５歳で新見藩儒丸川松隠の回陽館塾生となり朱子学を学ぶ。周囲の人々から神童といわれ、人の問いに治国平天下と答える。不幸にして１４歳で母を、翌年父を失うが、遺訓によって農商のかたわら悲痛の情を抑え日夜学問に励む。

文政８年（１８２５）、篤学の名声広まり微衷松山藩主板倉勝職より２人扶持を支給され、学問所で修業の許可を得る。文政１２年、２５歳の時には藩校有終館会頭（教頭）に抜擢される。京都に松隠の知友寺島白鹿を尋ねた後、江戸で佐藤一齊に主として陽明学を学び、佐久間象山や塩谷宕陰らの学友と学問、研究に没頭した。天保７年（１８３６）帰藩し、翌年有終館学頭（校長）に昇進した。藩内の子弟は初めて学問をすることの意義を知り精励した。天保９年、家塾牛麓舎をおこし、旧師の寺島白鹿の長男義一が京都より入門、進昌一郎（号は鴻渓）もこの年に入門、後に塾長となる。天保１４年には当時１４歳の三島毅（号は中洲）が入門する。弘化元年（１８４４）世子の板倉勝静、方谷に経史を侍読させて、他日、大いに用いるべきを知る。嘉永２年（１８４９）、板倉勝静が藩主となり、元締役兼吟味役として藩財政の立て直しのため、藩政改革の大任を与えられた。安政４年（１８５７）までの８年間に産業振興を中軸に行政、財政、兵制、教育の各分野の改革を計画的に進め、ものの見事に成し遂げて天下の耳目を驚かせた。

安政４年、藩政改革の成功をもとに、勝静は寺社奉行となる。勝静はさらに老中へと進み、徳川幕府最後の老中首座となり、幕政の中心人物となる。方谷はその政治顧問として国政の舞台で活躍する。安政５年長州藩士久坂玄瑞、翌安政６年長岡藩士河井継之助が来遊する。家を長瀬の里（現方谷駅）に移し、水山に陸田を開く。

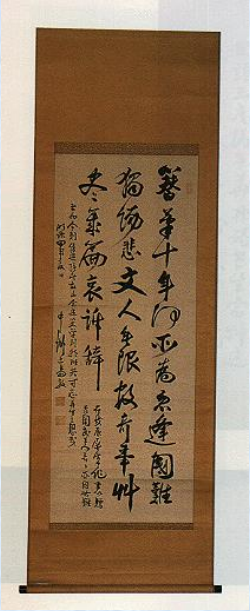
明治元年（１８６８）、松山城の無血開城を実現し、主君や領民の安全を守る。以後は世事をさけ専ら後進の教育に心血を注ぐ。明治２年、長瀬陰宅（現在伯備線方谷駅）の傍らに塾舎を建て、学規５条を掲げて訓育に臨んだ。翌年１０月には母の出所である小阪部に居を移す。長瀬塾、小阪部塾には全国から学徒が集まり、門下生は千人を越えたといわれ、教育に偉大な足跡を残す。

明治６年には、閉鎖されていた閑谷学校の再興につくし、以歿年まで春秋二回の講義を欠かさなかった。「備中聖人」と称せられる。著書に「義喪私議」「献策国字稿」「集義和書類抄」など多数あり、「山田方谷全集」三冊に収められている。明治１０年、７３歳、小阪部塾舎にて没す。

丸川松隠(まるかわしょういん)

漢学者。名は茂延、字は千秋、松隠はその号である。浅口郡西阿知村（現在倉敷市西阿知町）に生まれる。寛政元年（１７８９）大坂の中井竹山の門に入る。老中松平定信が竹山を介して召そうとしたが辞退する。寛政６年（１７９４）、新見藩主関長誠に招かれて藩学思誠館の督学教授となり、学制を改革し、学規を定めた。享和３年（１８０３）藩政に参与し、「型典」を著して藩政を改革した。門下生に山田方谷がいる。

三島中洲（みしまちゅうしゅう）



漢学者、詩人。名は毅、字は遠叔。号は桐南、のち中洲または絵荘という。窪屋郡中島村に生まれる。１４歳で山田方谷に従学する。２９歳のとき昌平黌に入り佐藤一斎に学ぶ。３０歳で備中松山藩に仕官し、藩学有終館会頭となり、のち学頭に進む。文久元年（１８６１）藩学教授の傍ら家塾の虎口溪舎を小高下に起こし、明治初年最も隆盛を極め、学徒は十二藩に及び塾舎常に６０～７０人を越す。明治５年（１８７２）朝廷の召しに応じ法官となる。明治１０年大審院判事を退職し漢学塾二松学舎（現二松学舎大学）を創設する。後に、東京帝国大学教授、明治２９年東宮侍講となる。大正４年（１９１５）宮中顧問官となる。著書に「霞浦游藻」「三日文詩」「論学三百絶」「中洲詩稿」「中洲文稿」「虎口存稿」など多数がある。

奥田　樂山　（おくだらくざん）

漢学者、詩人。名は盛香、通称は蕉蔵・貞蔵・貞介、号は樂山・蕉窓。儒学を中井履軒に、詩を菅茶山に学ぶ。板倉勝職に仕え、近習頭・吟味役を務め、藩校有終館学頭となる。火災に遭い廃校の議の起こった有終館を中之丁に再興する。学頭を辞した後も、後任の学頭山田方谷とともに板倉勝靜に進講する。風流を自ら楽しみ、住まいを莫過詩亭といった。著書に「莫過詩亭集」「備中話」がある。

進　鴻溪　（しん　こうけい）

漢学者、詩人。名は漸、字は于逵、通称は昌一郎、晩年には祥山という。号は鴻溪・鼓山・祥山・帰雲。牛麓舎開塾当初から山田方谷に学ぶ。昌平黌に入り、帰郷後川面で塾を開く。松山藩主に召されて藩校有終館会頭となる。安政３年（１８５６）には有終館学頭に任ぜられ、方谷の業績を継ぐ。文久元年（１８６１）吟味役となる。明治維新後は専ら教育に尽くし、天城、堺、赤穂、美作の落合等で教鞭をとる。著書に「春窓私録」「冬夜漫草」「鴻溪遺稿」がある。

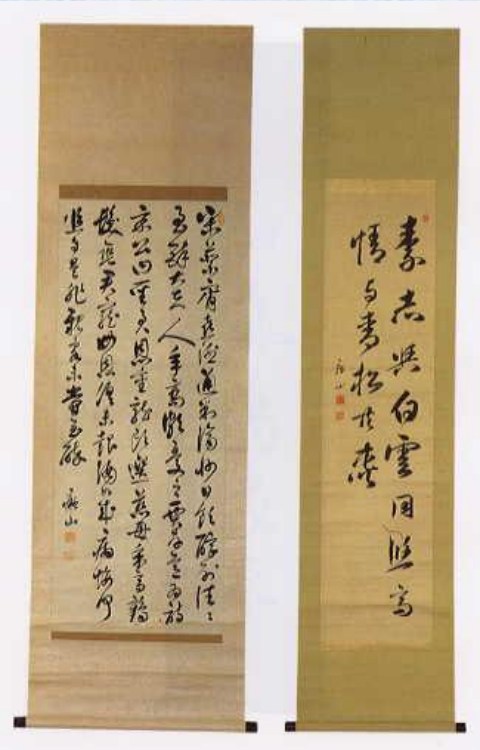
鎌田　玄溪　（かまたげんけい）

漢学者、詩人。名は博、字は子文、通称は宗平。号は玄溪、別号は篁園。医家に生まれ、幼時から家庭で教えを受け、天保９年（１８３８）大阪の藤澤東がいの門に入り荻生徂徠の学説を学ぶ。次いで江戸で昌谷精溪に朱子学を学ぶ。天保１４年玉島で家塾を開く。このとき川田甕江、柚木玉邨らが入門する。嘉永６年（１８５３）玉島に松山藩の郷校開始と同時に教授となる。慶応２年（１８６６）有終館督学、藩主侍講となり備中松山に居住する。廃藩後、久代（現総社市）の玄溪に隠居し、作詩したり、書画をかいて余生を送る。著書に「玄溪遺稿」がある。

荘田　霜溪　（しょうだそうけい）

漢詩人。名は正寛、字は子栗、通称は賤夫、号は霜溪・所甘廬。藩学有終館に入り、進鴻溪、服部犀溪に学ぶ。昌平黌に入り、帰藩して有終館会頭、大監察を歴任する。藩知事板倉勝弼の守り役となり、侍読を兼ねた。廃藩後山田方谷に学び、美作知本館及び温知館の教授となる。明治１２年（１８７９）有終館再興と同時に教授となる。

板倉　勝靜　（いたくらかつきよ）



幕末の老中、備中松山藩主。桑名藩主松平定永の第八子（松平楽翁の孫）。幼名は寧八郎・万之進、号は庫山のち松叟。天保１３年（１８４２）板倉勝職の養嗣子となり、嘉永２年（１８４９）藩主となる。安政４年（１８５７）寺社奉行となる。安政の大獄で寛典を主張し大老井伊直弼により奏者番兼寺社奉行を罷免される。文久２年（１８６２）老中となり幕政を担当するが、元治元年（１８６４）罷免され、翌年再び老中に復す。徳川慶喜の信任が厚く、よく将軍を補佐して幕政改革に尽力し、大政奉還に努力する。鳥羽・伏見の戦の後隠居し、松叟と号した。奥州に流転、箱館に渡航して榎本武揚の軍に加わったが、翌明治２年明治新政府に降る。のち、特旨をもって赦される。